

はじめに

「トカチ」の名前の元は「トカプ」です。トカプとはアイヌ語で乳の意味で、河口がふたつに分かれて海へと注いでいる様子を、乳房から尽きることがなく乳が流れ出ている様子になぞらえて、名付けられました。この他にも名の由来には色々な説がありますが、根拠が定かではないので、ここで書き記すことはやめておきます。

十勝川は蝦夷地東部の第1の大河で、母なる川と呼ぶにふさわしく、これに対して石狩川は父なる川といったところでしょう。この場所は箱館から590キロほどのところにあり、当時、松前藩の家臣がアイヌ民族と交易を行うために設置した「場所」のひとつ、幌泉場所の境にあるビタダヌンケから、クスリ（釧路）場所との境である築別までの一帯を指します。海岸沿いにおよそ90キロ、内陸では200キロほどあり、釧路、網走、常呂、石狩、沙流、新冠、静内、浦川、様似、幌泉の

11の場所に接しています。

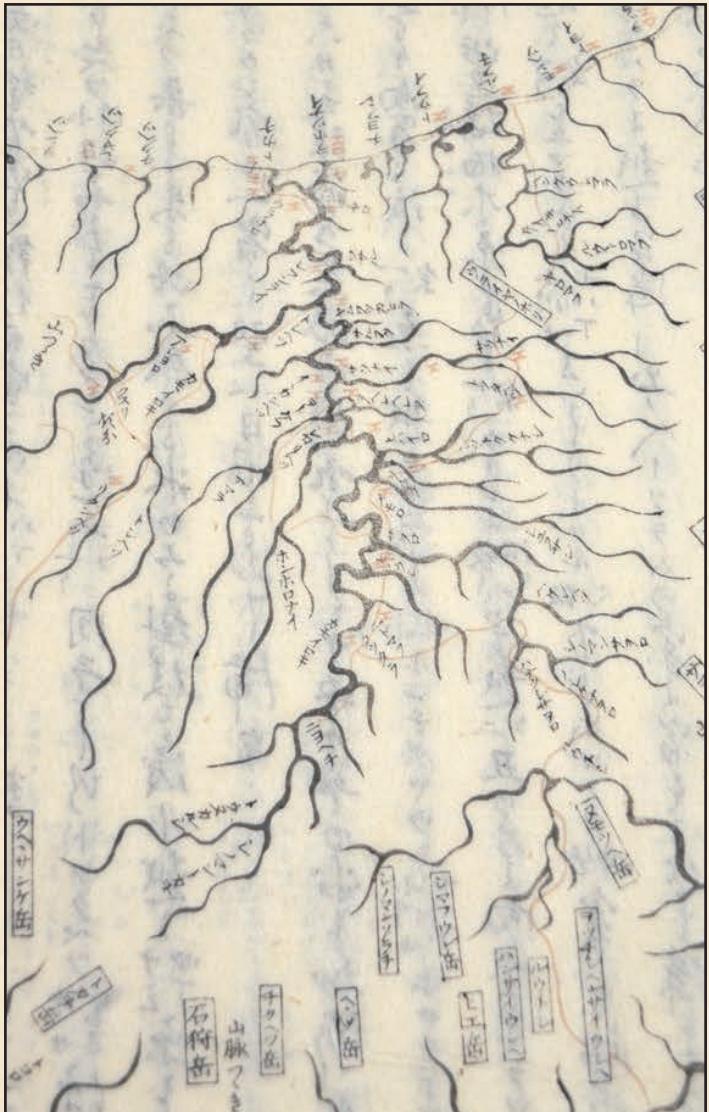
十勝川の源流は石狩川の源流と背中合わせになつており、今回私が山を越える場所はその分水嶺のひとつです。アイヌの人がこの山を越えることはありますが、これまでに和人がこの山を越えたことは一度もないといいます。

しかし、今回私はありがたいことに、箱館奉行所の命を受け、開拓のためにこの山道の調査を行

うこととなり、氷雪の上を石狩から入り、十勝に出て、その間の出来事を日誌5巻に書き記しました。

今回はその中から大まかな内容を抜き出して、石狩川流域については「石狩日誌」に記し、チクベツブト（現在の旭川市忠和の辺り）から、札内川と十勝川が合流するサツナイブト（現在の幕別町の辺り）までを詳しく記して、1冊にまとめ「十勝日誌」と名付けました。

しかし、十勝川の10の支流については今回の探査では調べていなかっため、ここには記さず、本流や川筋のオホツナイ川までのことを書き記しました。

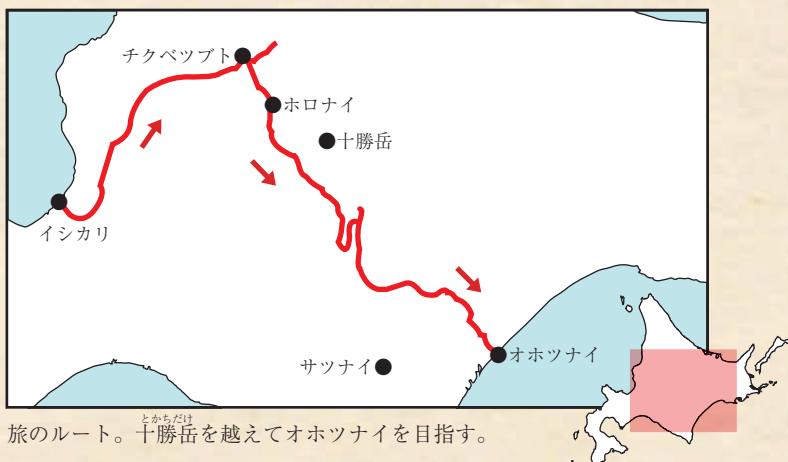


十勝岳連峰の峠を越えて帶広から十勝川沿いに太平洋側へ至る経路を記した地図。

その後、同じ年の7月に歴舟川から上り、いずれも十勝川支流の札内川、戸蔦別川、美生川、芽室川、然別川、音更川、利別川、浦幌川を越え、太平洋岸へと下った際の記録は、その報告を記した十勝誌4巻から、他の日誌として後日続編として1冊にまとめたいと考えています。

ですので、この書は、主に石狩から十勝への山越えの概略を書き記した内容となっています。この本を手にしてくださった皆さんも以上のようなことを理解した上で、じっくりと読んでいただきたいと思います。

万延元年庚申（安政5年・1858年）の初冬、江戸牛込杉並の庵にて源の弘（松浦武四郎）が記す。



旅のルート。十勝岳を越えてオホツナイを目指す。

遠くの山々はかすみ、草木は芽吹き、日に日に雪は解けてひさしから落ちる雪解け水は川に集まり、瀧のようになります。ここ、石狩の地にも春がやつてきました。

私はこれから十勝の厳しい山越えを想像すると、命が縮む思いでしたが、ここまで案内をしてくれた虻田のアイヌたちに賃金や帰りの食糧を渡すと、早速、石狩場所の責任者に、十勝方面への案内人を手配するように命じました。

石狩川の川端に出て辺りを眺めてみれば、渡し船は大きな氷の間を行き来し、時には数十トルはあろうかと思われるそれはもう大きな氷の塊が、雪解け水と一緒にものすごい勢いで押し流されてくるので、見ていても肝が冷える思いです。

ここよりも寒い北の海では、大きなクジラが河口近くの雪解けの氷に打たれて死ぬことがあると

聞いたことがあります、この様子を見ていると、まんざら嘘でもない気がしてきます。

この川を小さな舟で上るなんてことは、とても不安なため、陸を行くことに決め、箱館奉行所の石狩詰調査役、飯田豊之助にも同行をすすめました。

安政5年（1858年）2月19日

快晴。石狩場所の支配人らが、旅の同行者として、旭川

周辺のアイヌを連れてきました。小使のイソラムをはじめ、ノンク、サダ、ヤアラクル、アイコヤン、イナヲエサン、タカラコレ、イコリキナ、サケコヤンケらで、ふんどしや



石狩川河口 当別付近

石狩川は北海道で最も長く、人々や物資を運ぶ道として使われた。

手ぬぐい、たばこ、酒などを手渡し、旅の約束事を言い聞かせました。

今回は舟ではなく、歩いて行くため、道筋を尋ねると「冬の間、ここから徳富川の間は、まずは望来川の川筋から入り、阿蘇岩山の西南にある峠を越え、当別川の上流を渡つて、樺戸郡にある山の南のふもとに出で、ウラウシナイに出ることになりますが、今回は石狩川の本流に沿つて行きましょう」とのことです。

2月20日

四方の原野は春めいていて、遠くの方に煙のように春霞がかかつていて、西風に雪が舞う日もあり、本州では経験したことのない、気候風土の違いを感じます。

私たちは石狩川を東岸に越え、ワツカウイから山に入ろうとしましたが、辺り一帯は雪原で目標にする物が何ものないので、この状態を歌に詠みました。

いづくより 分やいらまし 白妙に
見ゆる限りは 雪の山端

(いつたいどこからこの雪山に分け入つて

探検を始めたらしいのだろうか

見渡す限り、真っ白な布を敷きつめたようだ)

この辺りは葦が茂る湿地で、冬の間は凍つてしまいますが、今の季節は氷が所々ひび割れて、その上を渡るのは非常に危険なので、あちこち迂回をしながら進みます。

雜木林に入つてしばらく行くと、石狩川の岸のオヨウに出ました。



冬の葦

イネ科ヨシ属の植物で、水辺に生える。たくさん並び生えるため、泥がたまりやすい。

川の上流を眺めれば、はるか遠く阿蘇岩山まで幅およそ3キロ、長さおよそ7.5キロにわたつて原野が広がつてゐる様子を眺めることができます。

これから川に沿つて進む方向はおおよそ東南の方角で、12キロほどでタカウナイという小川を越え、さらに12キロほど進んでトマンベヲマナイという小川の川原に小屋をつくつて野宿しました。

2月21日

非常に厳しい寒さに目を覚ますと、月が氷雪を照らし、まるで鏡のよう輝いています。さあ、夜明けとともにに出発です。4キロほどで石狩川水系のルベシナイ川を過ぎ、さらに2キロ進んだところで、幅13～15メートルほどの当別川の氷の上を歩いて渡りました。当別川の源流は阿蘇岩山と厚田の山の間から流れ出でているということです。

ここからは東北東に向かつて4キロほど進みました。小さな山のユワエサンを過ぎてさらに4キロほ

ど進み、川幅およそ3.5～5.5メートルの篠津川を渡つた辺りから、高原になり、見晴らしがよくなりました。
北は樺戸岳、東には夕張岳、東北東には奥徳富岳、南南東には島松岳の位置に当たります。篠津川の上流には篠津山があり、樺戸の山々と連なつてゐるといいます。

雪が解けた道は足が取られてしまい、思うように進むことが出来ません。6キロほど進んで小川のシユマウニウスナイ川を越え、さらに4キロほどで、標津岳に源流があるという川幅11～13メートルの標津川を越えました。

夕方になつて雪が降り始め、野宿する仮小屋が強風に倒されないよう、木を切つて重石にして眠りました。寒さといつたら、虻田を越えた時よりもさらに厳しく、アイヌたちが交替で起きて、夜が明けるまで火を焚き続けてくれました。

小屋から500メートルほどと思われる辺りにオオカミが2、3頭いてしきりに吠える声が聞こえてきます。その声といつたら熊が吠える声よりも何となく物寂しく、その上、雪の山中に吹き荒れる風

の音に乗って聞こえてくるので、我々の食糧をあさりにここまでやつて来るのではないかと思うと、心配で眠るに眠れません。月が上る頃になると、益々寒さがひどくなり、耳をすませば、ピンピンと何やら山に響く音も聞こえてくるので、いよいよ心細くなつて何の音かとアイヌに尋ねると、トドマツの木の幹が凍つて割ける音だということで、「この時期には珍しいことですが、10月～12月の上旬にはこの音が激しくて、眠れないこともあるんですよ」と語ってくれました。夜明け前から、雪は益々降りだしました。

2月22日

激しい吹雪に向かつて出発です。800メートルほどでタヲマナイ、650メートルほどでヌツハラマナイ、28キロほどでアツウシナイ、さらに2キロほどでタエノスケ、2キロほどでトムシユイというそれぞれ小川を過ぎましたが、目も開けていられないほどの猛吹雪になつたので、仕方なく野宿をすることにしました。

2月23日

快晴。北北東に向かつて2キロほどのところで、札比内川、さらに2キロほどのところで川幅7メートルほどの晩生内川に出合いました。この川の源流は樺戸の山々にあるとのことです。それからさらに2キロほどでヒンタウスナイ川、さらに1キロほどで川幅18メートル余り、全長4キロほどのヲホヒチヤンという川に出ました。ここは鮭が多く、産卵場所になつているとのことです。

そこからさらに4キロほど進むと、浦臼内川で、そこには

人家が2軒ありました。それから2キロほどで黄白内川、1.7キロほどでドエと呼ばれる沼がありました。この沼は幅が



札比内川

「かれた細い沢」を意味するアイヌ語「サッ・ピ・ナイ」が名前の由来。

11トルメーほどですが、長さが2キロもある長い沼です。さらに2キロほど進むと崖があり、4キロほどで幅11トルメーほどの樺戸川に出ました。この川も樺戸山から来る流れということです。ここで野宿をしましたが、随分と暖かな土地でした。

2月24日

夜明けに出発し、北東を目指します。2キロほどでチカフセトシ、そこから6キロ余りで小川のトレフウシナイ、ウラシベツがありました。ここで、これまでの探査に同行してくれたこの地域のアイヌの長であるセツカウシに出会ったので、ここから先は彼と一緒に行つてもらうことに



徳富川

新十津川町の中央を流れる川。釣り場としても親しまれる。

しました。それから2キロほど進むと、源が暑寒別岳にあるという、川幅およそ40トルメーの徳富川に出会いました。この場所を渡るのに、所々割れた川の氷の上に木の枝を渡しながら、川向こうへとたどり着きました。そこからさらに1.4キロほど原野を歩き、セツカウシの家に着き、今夜はここに泊まることにしました。翌日も一日中激しい吹雪のため、ここに留まりました。

2月26日

曇り。暖かくなり、雪解け水で川の水かさが増し、畳10枚、20枚分もあるうかという大きさの氷の板が、次から次へと流れて来ます。その川を向こう岸まで渡り、4キロほどの平原、そしてラウネナイ、ホンチボヤウシという小川を過ぎ、そこからさらに3キロほどでホロチボヤウシ川があり、この辺りから4キロほどは樺や柏の林が続きます。ウリルンという長い沼を越え、8キロほど北北東へ進みました。ユウベヲツという小川があり、その先4キロほどでシユマウナイという小川、また、

2キロ進んでリイフルという坂を下ると、ホロノタという名の岬みさきに出ました。私たちはここで舟を呼び、向こう岸のベツバラに渡りました。

同行しているアイヌのイソラムがこの場所の出身で、今夜は彼の家に泊まることにしました。となりに住むヤエケマツ婆さんばあが長い間病気とのことで、たくさんの女性たちがお見舞いに集まっていました。その中のひとりに、ヘシリウタレという老女がいて、まじないで病を治す巫医ふいでした。病気の人があれば神に祈りいのを捧げ、薬などの指示もするのだといいます。

その祈祷きとうというのは、病人の枕元まくらもとにチタラペきとうというゴザ



イナウ
アイヌ民族が神に捧げる木製の祭具。

を広げ、太刀、短刀、刀のつば、矢筒を飾り、イナウを立てて山海の神様に祈り、「どこそこの方角から、何々という薬草を摘んできて、薬にしなさい」とか、「この病人は治るかどうか」といった予言よげんもするので、本州ほんしゅうにいる祈祷師きとうしと同じことです。また、ここよりも奥地では「待ち人が現れるのが遅いか早いか」や「行方不明ゆくえふまい」人がいる方角は」なども占うといいます。さまざま不思議な予言や儀式ぎしきを行うこともあるといい、宗谷そうやの辺りではこういうことを「シノチ」と呼んでいました。

さて、そのアイヌ伝來の薬草とそれぞれの効能こうのうを少し紹介しょうかいしましよう。まず、風邪かぜにはイブ



チタラペ

無地のものは日常生活で、文様のあるものは儀式で使われる。公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構提供。

キボウフウというセリ科の多年草を刻み、煙草のよう^{きみ}^{たばこ}に服用します。目の病にはシオンというキク科の多年草を水に浸して用います。産後の血の道にはツリガネニンジンかマメ科のサンペンズを、子どもの口の中のできものにはハマナスを使います。胃の急激な痛みにはオタネニンジン、胸の痛みにはヤマシャクヤクの根を、腫物の吸出しにはユリ科のマイヅルソウを唾で濡らして当てておきます。梅毒にはマンネンスギ、胸骨の痛みにはシダ植物のイワオモダカやカツベラソウ、腹痛にはヨモギ、寒気を払うのはコブシやイワスゲ、沼草、鼻血にはバラ科の多年草スイヨウバイ。この他にも薬草にはイケマ、トウカママフ、ショウマ、



サンペンズ

別名カワラケツメイと呼ばれ、薬用茶として用いられる。

2月27日

快晴。出発して少し行くと上川のアイヌの舟が10艘余り岸に引上げられているのに出会いました。どうしたことかと聞いてみると、「去年の冬、浜から夏の仕事を終えて石狩から帰つて来る時に、川が凍つてしまつて舟をこぐ櫂も凍り付いて重くなり、時々鉈で氷を割りながらようやくここまで進んできたのですが、寒さが益々厳しくなり、舟に掛かるしぶきもすぐさま凍り付いてしまう有様で、ここから先へ川を上ることは無理だと思い、舟を岸へ引き上げて、荷物はそれぞれが背負つて上川まで帰つたのです」と話します。「それなら凍る前に川を上れば良かったのではないか」と

聞いてみると、「いつもの年なら上川まで舟で帰れたのですが、昨年は御組頭様のご通行が遅れたため、上川へ帰るのを引き留められ、このようになつてしまつたのです」ということです。このような話を聞くと実に「民を使うに時を以てす（＊孔子の言葉 国民を公役などで使う際には、適切な時節にすることという意味）」という教えは、なるほど、こういうことか、気を付けなければならぬな、とつぶやきながら歩きました。

この辺り一帯は平野で、西北に雨竜の山々が連なり、気候も暖かいのか雪解けも早いようです。東北東へ2キロほど進むと、小川のサルトコイ、そこから4キロほどで小川のメム、そこからさらに600メトルほどで小川のニウシベツを過ぎて1キロほどの石狩川の川岸で呼ぶと、女性数人が氷の間を小舟に棹さおをさして近づいて来ました。その舟に乗り、川の中ほどまで進み、そこからは川に浮かんだ氷の上を歩いて、向こう岸へと渡りました。

ここはイチヤンといって、人家が4軒ありました。そのうちの1軒に23～24歳の女性がいました

が、戸籍簿への記載きさいが漏れたままになつていきました。夫はおらず、年老いた母の介抱かいほうをしており、浜へは一度も行つたことがないといいます。この話を聞いた同行者の飯田豊之助氏は「なんという親孝行の娘だ」と大層感動し、「ここに同行している上川のアイヌのサケコヤンケはまだ独身だから、この娘さんをお嫁さんにしてはどうか。石狩に帰つたら、私がうまく取り計らつてあげよう。また、アイヌの風習で初めて男性と会う時に身に着ける衣装いしょうがあるが、その服をこしらえる木綿もめんの布を私が贈りましょう」と、親身に話され、この娘の常日頃つねひごろの行いなどを色々と記録していました。



深川橋から見た石狩川

この地点の石狩川は大きく曲がり、美しいアーチを描いている。

ここを出発し、音江川おとえを過ぎて小山に登り、雑木林やシイベヌカルという小川の断崖だんがいの上を通りました。ここからは、蛇へびのように曲がりくねつている石狩川の川筋が良く見えます。ここを舟で行けば約5.5キロもの行程になるので、山を越えることにしました。

タムニ、ケナシバオマナイ、ビラノシケヲマナイ、キヤチヤウシナイ、エクトシユマ、タツカシユマという小川と、約3キロの平野を過ぎて、川幅13メートルほどの内大部川ないだいぶに出ました。大木を倒して橋にして川を渡り、今夜は近くにあるホロシユマチセという大岩崖だいがんがいに泊まる予定でしたが、根雪が非常に深くて埋もれてしまつて見つけられなかつたので、2キロほど歩いてヲランナイという小川の岸で野宿をしました。

一夜をと 賴ミし岩は 埋もれて

はてなき野辺に 仮寝かりねしにけり

(一夜を過ごそと頼みにしていた岩屋は雪に埋もれてしまつていたので
はてない野原を仮の宿としました)

2月28日

真冬のような猛烈な風もうれつに雪が舞い、それはまるで本州で砂嵐すなあらしが吹き荒れるのと同じような状態です。磁石の針じしゃくのはりを東北東に定めて2キロほど歩き、トドマツが生い茂る山に登りました。その山の険しさといつたら、手のひらを天に向かつて立ててているようで、一歩踏み外せば、物凄く深い谷に落ちてしまう非常に危険な場所です。それを1.8キロほど進むと、切り立つた崖ひじょうにあり、アイヌの人々が神様の住む場所だという神居古潭かむいこたんに出ました。

以前に訪れた際に見た珍しい形の岩や石は、みな雪に埋もれて益々ますますあやしさを増し、山々の木々に降り積もつた雪



神居古潭

「カムイコタン」はアイヌ語の「神の住む場所」という意味。

はまるで霜の刃を立てたように見え、剣の山とはこのようないものかと、思わずにはいられません。春の暖かさで、崖から下がるつららが折れる音が山々にこだまし、ホロレブシベから流れ落ちる水が氷の裂け目に落ちて、ほら貝を吹くような音を絶えず立てています。

ホシノミンダルマイという両岸から突き出ている2つの岩は、降り積もった雪によつて連なり、遠くから見たら白い虹が現れたのかと思うほどで、近くで見ると石橋のようにも見えました。また、テツシオマナイの滝は凍り付いて、玉で飾つたすだれのように見えるなど、2キロほど続くこの辺りの景色は、夏とは違つた美しさがあつて素晴らしいと

思いました。

春志内に到着し、ここからは1キロほど断崖を登り、小川のベンゲアソナイを過ぎてトドマツの山に登りましたが、かなり厳しく辛い道が2キロほど続きました。さらに川沿いに1キロ余りで、ルチシノボリという峠に出ました。木々の間から東の方を眺めると、旭岳、チクベツ岳、ベベツ、ビエイ岳といつた山々が連なり、その間の大広原は雪が積もつて銀盤のように見渡せました。

ここから小さな沢を4、5カ所渡り、およそ4キロでランネナイ、ヨウコシナイを過ぎ、幅7メートルほどのエヌブトの川



旭岳

2,291mと北海道で最も高く、日本で一番長い間雪を楽しめる山。



バラ・モイ

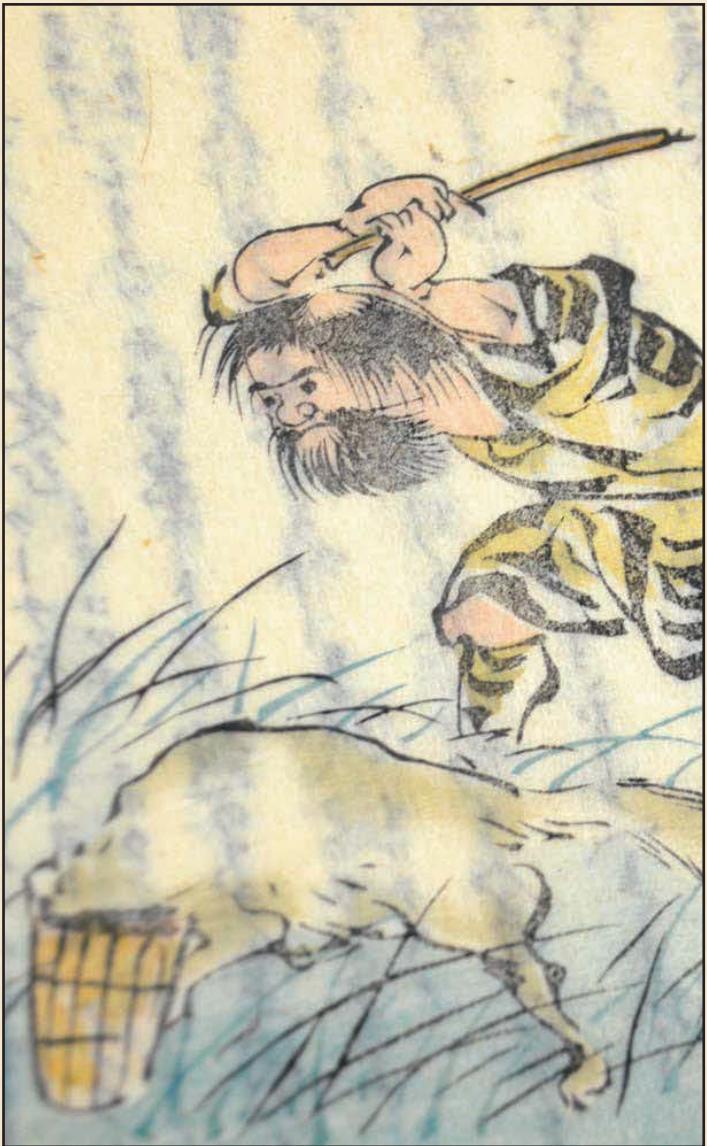
アイヌ語で「バラ（広い）モイ（湾）」という意味。神居古潭のひとつで、船着場として使われていた。

2月29日

川の流れに沿って雑木林の中を上り、2つの小山を越えて2キロ余り進んで原野を下り、さらに500メートルほど原野を下つて、キンクシベツの後ろ側の沢を下り、2キロほどで出発点であるチクベツブトの大番屋おおばんやに到着しました。

私たちは、ここで冬を越した玉川慶吉氏と出会いました。まずは長旅の無事を祝い、糀6キログラムと玄米12キログラムを分けてもらつて酒を仕込んでくれるよう頼んでおき、同行したここ上川出身のアイヌ全員に手当を渡し、それぞれの家に帰しました。

この辺りはキツネがたくさんいるといい、セツカウシは一升入りの古い油の樽たるをどこからか持つてきて、しばらく考えていたかと思えば、この樽に三寸釘さんすんくぎ（9センの長さの釘）を3本、樽の外側から内側に向けて打ち、番屋ばんやの裏に置いておきました。その日の夕方、セツカウシはキツネが1匹とれたと持つて来て、料理してくれました。樽にしみ込んだ油の匂においにつられたキツネがこれを舐めよう



キツネを狩るアイヌの図。画家の春木南溟はるきなんめいが描いたもの。

として首を突っ込んだところ、釘が首に引っかかつて抜けなくなっているところを隠れて見ていて、打ち殺したのだといいます。夜にはイワンパカルとクウランケが番屋を訪れ、翌30日にはキッチンコロとタヨトイのふたりが熊の新鮮な肉を手に、私が無事に到着したことを祝いに来てくれました。

3月1日

穏やかな日和で、雪解けがかなり進みました。この日は石狩川上流の人々の家を見て回りました。ルイベという雪に漬けて置いてあつた生の鮭を切り、ルサという茅で編んだ盆のような器に盛り付け、マキリという小刀と、皮をむ



マキリ

アイヌ民族が使った、生活に欠かせない道具のひとつ。木を彫ったり、料理にも使った。

いた1本の柳の枝、それにひとつまみの塩を添えて出してくれました。それは生の鮭を食べられないのであれば、柳の枝をマキリで串に削って、鮭を刺して火であぶつて食べてください、というアイヌの人の心遣いです。また、このほかに、コサというつる植物で唐花草の根を煮たものや、つる植物のイケマの根を焼いて出してくれたところもありました。夜はアサガラで一泊し、翌日の夕方、チクベツの大番屋に戻りました。

3月3日

先日仕込みを頼んでおいた濁り酒をこし、イナウをつくり、十勝方面の山越えに一緒に行く人を決めました。キッチンコロ、タヨトイ、アイランケ、シリコツネ、ニホウンテ、ヤーラクル、セツカウシ、タカラコレ、サタ、エナヲエサン、サケコヤンケ、アイコヤン、イワンパカルの13人で、このうち、シリコツネは以前から十勝越えの案内をして詳しいので案内人とし、その他の者には荷

物をそれぞれ割り当てました。また、ノンリ、イソラム、イコリキナの3人は石狩に帰らせました。

3月4日

暖かな日です。ここ上川に暮らすアイヌたちを呼び集め、旅の安全の祈りを捧げました。私もイナウを捧げ、神酒^{みき}と一緒に飲みました。アイヌのひとりが言うには「川の水が急に減っていますが、これは上流の水が凍つたからで、山々が冷えて寒くなりますよ」とのことです。

3月5日

早朝に出発して辺別川^{へべつ}を越え、クーチンコロの家に着きました。ここでは、昨夜、山から帰つてきたばかりのイソテクが、熊^{くま}を1頭^{かず}背負^せつて私たちの到着を待つていました。

ここから原野の道をしばらく進み、ニヨベツ、ニケウルルホンケシ、トヌシコマナイといった小

川などを過ぎ、シタウナイ、メメトツケシという小川、さらにはシネヒンニウシという小さな丘^{おか}、イワンコンクツシやホロヌ、ホロトウブという小川などを渡りました。この間の小川はすべて辺別川に注いでいます。

ウフシノボリという山のふもとの崖^{がけ}をおよそ10キロにわたって木の根に取り付いて渡り、川幅23メートルほどの辺別川の本流の岸に出ました。川には雪解け水があふれんばかりに勢いよく流れ、ここをどうやって渡ればよいかと考え込むほどでした。すると、はるか上流に大きな木が1本、倒れて川の中に横たわっているのが見えるではありませんか。



辺別川

アイヌ語の「ペ・ペッ」(水・川)から名付けられた。
水が多く流れが速い様子を表している。

ません。これは無理かと思つていると、同行者のひとり、タヨトイが衣服を脱いで裸になると、木の上を渡つて行き、手早く枝を切りはらい、今度は川に飛び込みました。彼の歩いている様子を見たら、水は腰ぐらいまでしかありません。増水していく深いと思い込んでいましたが、浅瀬あさせだつたのでしょう。タヨトイが簡単に向こう岸へと渡り切るのを見て、私たちは皆、裸になり、丸太を渡つて川の半ばまで行き、その後は川の中を歩いて岸にたどり着きました。岸の草原で火をたき、体を温め、衣類を乾かしました。

石狩川の支流の美瑛川に注ぐ、ヲマクシベツ川、トウセシナイ川、ホロアツナイ川を過ぎて小山に登りましたが、この

辺りは暖地のようで、雪はほとんど解け、カタクリやフキノトウ、フクジユソウ、行者ニンニクなどの芽が出始めています。4キロほどでホロナイという小川に到着し、野宿をしました。その夜、フキノトウを摘んできて和え物にして食べましたが、本州のものとは違つて少しも苦くありませんでした。夜になつてキツネを1匹捕りました。

3月6日



フキノトウ

春の代表的な山菜。天ぷらにしたり、調味料ちょうみりょうとあえたりと食べ方はさまざま。



美瑛川

景勝地として知られ、「ブルーリバー」とも呼ばれている。

が小石ばかりでその流れは滝のよう^{たき}に激しく、厳しい冷たさに指がちぎれるかと思うほどです。

それから小川のヒエナエイを経て丘に登り、さらに野原を2キロほど進んで大きな岩の上に登ると、四方の山々が良く見えます。ここで草原に火を放ったところ、風にあおられ、その炎^{ほの}はまるで獣^{けもの}が走るような勢^{いき}いで広がり、1キロほどその焼原を下って、ホンビバウシ、ホロビバウシの2つの川を渡り、トドマツの山を越えて4キロほどで、さらにホンカンベツ、ホロカンベツの2つの川を渡りました。これらの川は空知川に合流する川です。

ここからさらに4キロほど進むと、葦^{よし}の茂る原野を抜け、

富良野川^{ふらの}の岸に出ました。この川の水は十勝岳の硫黄山^{いおう}が源流なので、硫黄^{いおう}の匂いが鼻をつき、手ですくつて飲んでみようとしたが、アイヌたちが「毒^{どく}があるからやめなさい」と、止めました。その昔、十勝のアイヌたちが寒い中、この場所を通り、この川だけが凍つていなかつたので、毒とは知らずに川の水を飲んでたちまち死んでしまつたと伝えられているそうです。どんなに厳しい寒さにも凍らず、また一尾^{いおひ}の魚も住むことはない川なのです。この川を渡り、原野を2キロほど進み、小川のクヲナイを越え、レリケウシナイという小川の岸辺^{きしべ}で宿営しました。



美瑛町から見た美瑛岳

かつては硫黄で川が濁っていたため、アイヌ語で「油ぎた」を意味する「ピイエ」が由来。



望岳台から見た十勝岳

標高 2,077m の火山で、武四郎が訪れる 1 年前（安政 4 年）に噴火した記録が残っている。

から12キロ余り、西は空知の西の山々までの間およそ50キロ余り、そして南北に20キロほどは視界を遮るものはなく、広野が見渡すことができます。山に囲まれた地形なので、暖かく、本州の1つの国に値するほどの広さがあります。

同行している飯田氏は「これほどまでに素晴らしい土地があることは誰も知らないでしょう。帰つてこのことを皆に説明しても、誰も信じてくれそうにありません」などと、とても感嘆していました。夜になり、アイヌに火を放たせて眠りにつきましたが、次第に燃え広がり、風も強くなつたため、夜中にはその火は四方に燃え広がり、天をも焦がす勢いとなつていたのでした。

3月7日

明け方、風はますます強くなり、火の勢いもさらに増していました。焼け野原を1キロ余り歩き、小川のフシコベツを過ぎると、中川のイワヲベツがありました。これらの川も火山帯から流れてい

るので、水は酸味があります。2キロほど進んでレホシナイ川から平山のコロクニウシコツを登り、さらに4キロほど進んだところで樹木の多い場所に着き、ニヨトイを過ぎトドマツが生い茂る笹原に入りました。そこから600メートルほど下り、ベベルイ川を渡つて2キロほど進むと、水に流されて丸くなつた大きな石が転がる川原があり、その石の上には雪が被つていました。

その石の上を歩いて渡つていくのですが、時々石と石の間に足を踏み込む恐れがあつて、この上なく危険です。

少し進むと、雪の上に昨日あたりに人が通つたと思われるかんじきの跡を見つけました。その600メートルほど上には



かんじき

雪や泥などの上を歩くための道具。わらじの上から取りつけた。

仮小屋の跡もあります。アイヌたちは「これは十勝のアイヌが獵に

来た跡ですよ」などと言うので、なぜ分かるのかその訳を聞いてみ

ると「小屋の作り方で分かるのです」と教えてくれました。

この辺りはトドマツやエゾマツがうつそうと茂った森で、見上げても空の色が見えないほどです。2キロほど歩き、森の中で野宿をし、雪を溶かした水で米を炊きました。その夜明け、雪の底に水が流れる音を聞いたので、傍らにあつた木の皮をはいで一首書き記しておきました。

今朝はやく 岩間の氷 融^{とけ}そめて

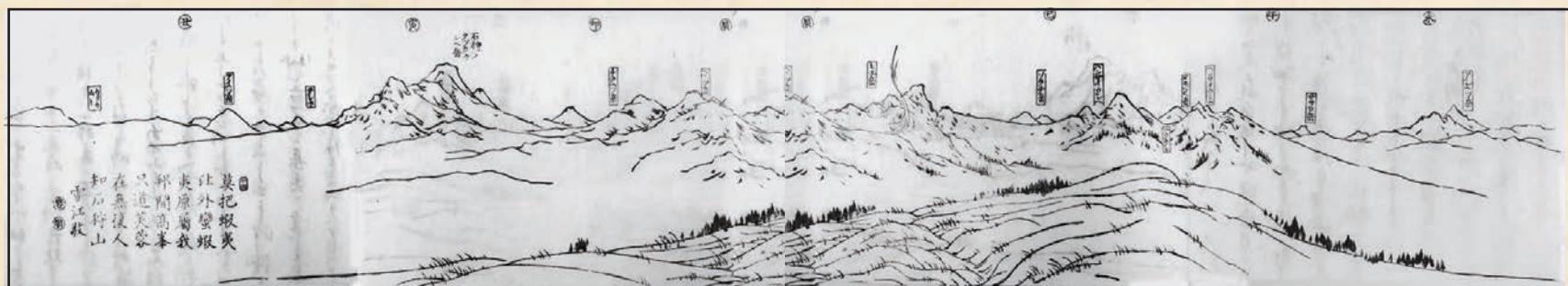
落くる音に夢もくだけぬ

(早朝から岩の間の氷が解けて

落ちてくるその音で目が覚めてしまったよ)

3月8日

夜明け前に出発。山はいよいよ険^{けわ}しくなり、600メートルほど登つたら樹木はまばらになりました。その樹木も折れ曲がったカバノキばかりです。山はさらに険しくなり、やつとのことで登りながら後ろを振り返つてみると、一昨日に野宿をした辺りから空知川までが眼下に見え、そこからさらに2キロほど登るにしたがって、十勝岳、ベベツ岳、チクベツ岳、石狩山などが、はつきりと見えるではありませんか。このように、苦しい思いをして山をよじ登りながら、谷間から雲が軽く吹き上がつてくるのを見て



えみしらも　あゆみなやめる　石狩の

山路に早き　雲の足かな

(アイヌの人たちも越えるのに苦労する)

石狩の山越えの道に雲が早く流れていくことだ)

などと、戯れに詠み、凍つた雪を口に含み、立ち止まつては息をつぎながらようやく800メートルほど登り、午前10時を過ぎたころ、峠の上に到着することができました。ここまでくれば、この先1.7キロほどは平地です。右に前富良野岳、左は富良野岳といい、これらの峰続きに十勝岳、ベベツ岳、チクベツ岳、石狩山と連なつて見え、その後方には空知岳、上ホロカメットク山、下ホロカメットク山が並び、はるか遠く南の方角には、然別岳、十勝岳、南西の方角の近くにはヌモツペ岳、その後方には夕張、芦別の山々が少しづつ顔をのぞかせ、ここで今までの景色は一変します。

しばらく行くと、五葉松の低く茂つた上に降り積もつた雪が暖かさで解けていて、かんじきをつ

けた足が枝の間に踏み込んでしまうので、非常に歩きにくくなりました。

そこから小川のヌモツペの源流の辺りの沢への下りとなり、トドマツが多くなりました。2キロほど進むと、シユマウシナイという小川に出ました。この川の水は鉄分が多いので、なかなか飲めるものではありません。ここを過ぎてニナウシユという小川に出ました。空知川の上流には3つの



上富良野の頭彰碑
武四郎が上富良野を探査したことを記念し、松浦武四郎頭彰之碑建立期成会によって建立された。

支流があり、これが合流して1つの流れとなっています。

この辺りをあちらの岸、こちらの岸と渡りながら歩き、午後5時ごろ、ようやく川幅14メートルほどの空知川の上流に出、西岸に渡つて野宿をしました。この辺りはツツジやシャクナゲが多い場所です。夜になると、身の丈が1.2メートルほどの熊が川の向こう岸にいるのを見つけたので、犬に追わせて崖の下に追い詰めて、獲ることができました。

一すじに 己が命を まと的として

おもひ射る矢ぞ 何あやまため

(この矢は、自分の命を標的にする気持ちでひたすらに射る矢だ
どうして撃ち損じることがあるだろうか)

すると、一緒にいた飯田氏もその近くに

飛雪刀風歩欲窮 已聽一吼響長空 飛雪刀風、歩くに窮さんと欲す 已に聴く、一吼が長く空に響くを
鬢間貯得三寸磐 惣見毛人斃猛熊 髪の間に貯え得るは、三寸の磐 忽ち見る、毛人が猛熊を斃すを

(刀を振るう勢いで起きる強風と雪に歩きかねているときに

果てしなく広がる空に、吠える声を耳にした

昔、髪の毛を束ねたところに9センの矢じりをいつも持っていると伝えられる

勇敢なアイヌたちはたちまち猛獸の熊を倒したよ

しかし、この夜は全員が下痢になり、大層困ったのですが、このことを後で十勝の人々に話したところ「シユマフウレナイ川の水は、その水源に毒があるので、たつた一滴口にしただけでも、下痢をしますよ。それをお椀に1杯も2杯も飲めば、すぐに死んでしまいます」と、教えてくれました。水の色がおかしいと思った時は、絶対に飲まないと改めて思いました。

3月9日

ここまでで、おおよその山や水脈の様子が分かつたので、案内人のシリコツネとタヨトイを返

すことにしました。この2人はここから空知山に入つて狩りをしたいと言うからです。さて、ここから断崖によじ登り、800メートルほど進むと峠に出ました。この辺りはカバとトドマツばかりで、ここが東西の分水嶺になつています。

東南の方角に進もうと、4キロほど峠から下つてみたら、なんということでしょうか、そこは昨夜泊まつた空知川の川岸でした。これには大変驚いてまた元の方角に戻り、しばらく峰伝いに行きました。右の方に行けばシノマンサヲ口、左の方に行けばリノシケサヲ口に出ますが、次第に木々もまばらになり、ここからは南西の方角に佐幌岳、西には夕張岳、その後ろには沙流の山々が見え、左を見れば

十勝連山、オプタテシケ山などが雲間から峯が突き出ている様子が見えます。

少し進んで左側に800メートルほど下ると川幅5メートルほどのノシケサオ口の沢に出て、それに沿つて進んでいきました。山をひとつ越え、バナクシサオ口川に出、そこからさらに川伝いに下つて、夕方、川幅14メートルほどの佐幌川の本流に到着し、南岸に越えたところで野宿をしました。

この辺りは雪も非常に薄くなつていきました。「今日の行程はどう考へても1日で来られることができるはずがなかつたのに、皆が『もうすぐサヲ口だ』と心を奮い立たせて頑張ったので、順調に進むことができましたね」などと、



十勝連峰

とかちだいせん
十勝岳、美瑛岳、富良野岳、トムラウシ山などの山々が連なる。



佐幌岳

アイヌ語で「下方の川」という意味の「サ・オロ・ペッ」が名前の由来。現在はスキー場として親しまれる。

口々に話し合いました。

消のこる 雪の明りに 朝出して

春の日長く なほも思ほゆ

(消え残った雪のあかりを頼りに早朝出発した)

こんなに長く歩けたのは春になつて日が長くなつたからだと強く思われる)

3月10日

穏やかな朝を迎えて出発しました。ここから川を南岸に沿つて行くか、北岸を行くかがなかなか決められないでの、戯れに

ふミ分て 越べきかたは 何所とも

いざ白雪の 山のかけ道

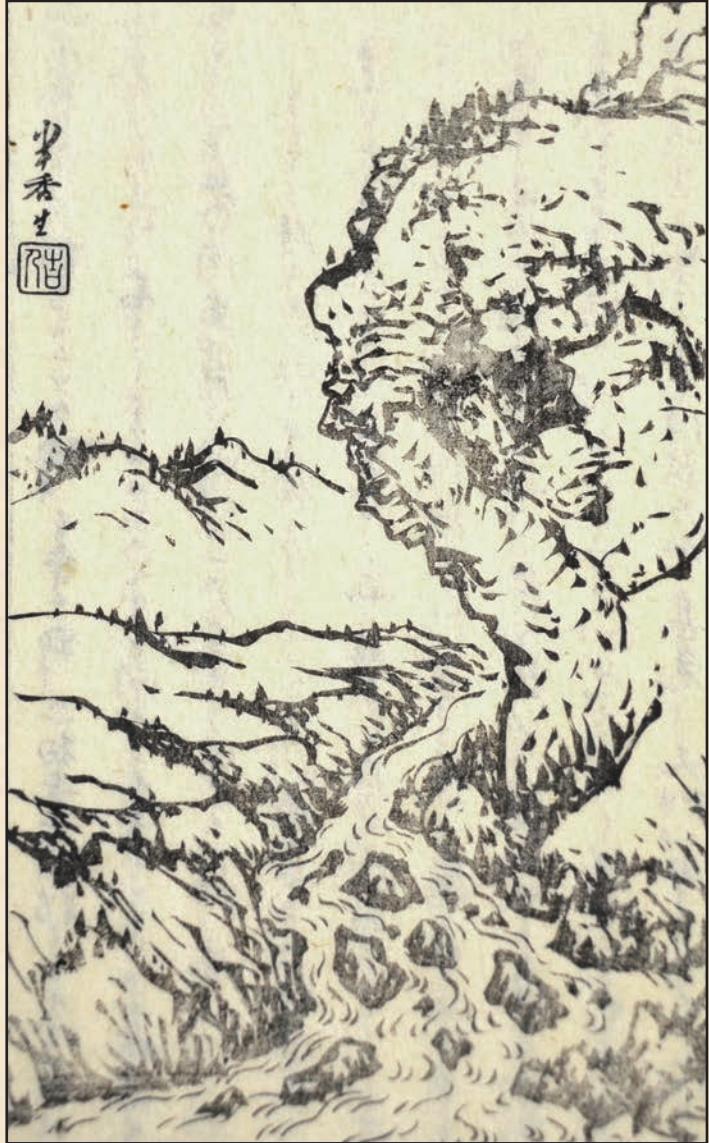
(私たちが踏み分け、越えていくべき道がどの方向であろうとも

さあ、白い雪が降り積もる山の崖道へと踏み出そう)

と口ずさみながら900メートルほど下ると、北岸に広い平原が広がつているのが見えました。これならば人里が近いはずだと思い、進んでいくと、網目のように獸道があり、そこを樂々と6キロ余り下つていき、小川のヒタルンナイを過ぎ、さらに4キロほどで美馬牛という小川、さらに2.5キロほどで札的川に到着しました。この辺りは鹿がたくさんいて、逃げる様子がまるで蜘蛛の子を散らすようでした。そこから4キロほど先は谷地になり、約1キロ行くと、川幅50メートルほどある十勝川の本流に出ました。雪解けで増水した川の水はどうどうと大きな音を立てて流れ、矢のように早い激流は泥のような色をしています。向こう岸を眺めると、ものすごく高く切り立つた険しい岩壁の中ほどに、深そうな洞穴が1つ見えました。それは鬼が斧をふるつたかと思われるほど、岩が尖つており、ギザギザの岩壁は鬼の顔のようにも見えるところや、帯を折りたたんだように見える場所もあります。

高く険しいこの岩壁に、木々がまるで髪の毛のよう^{かみ}に絡^{から}まつた場所があり、アイヌの間ではここを「カムイロキ」、

神のいる場所と呼んでいます。昔からこの洞穴には中に入ると生きて帰つてくることはできないと伝えられており、この岩にイナウを立ててお祈りをしてから通るのが習わしです。言い伝えによれば、その昔、一人のアイヌが岩壁の上から縄^{なわ}を降ろし、それを伝つてこの洞穴に入ったところ、戻^{もど}つてはこなかつたそうです。それで、その息子^{むすこ}も同じように入つてみたけれども、やはり戻^{もど}つてはこなかつたそうです。それ以来、この洞穴に入ることは厳しく禁じられているとのことです。



カムイロキの図。画家の福田半香が描いたもの。



カムイロキ

「^{しんじく}浸食^{せき}により生まれた巨大な岩壁。「神が座る場所」という意味。

ほんりゅう 本流に沿つてそのまま2キロほど下ると、180メトル四方はある砦の跡を見ましたが、今はイバラ

や低木のハシバミなどが生い茂っていました。ここを過ぎて少し行くと、1軒の家がありました。そこはシユンクラン家で4人が暮らしていましたが、家に入ると私たちを見て驚き、その上、私たち一行にイソテクがいることにも驚いて、丁寧にもてなしてくれたので、ここに泊めてもらうことにしました。ガガイモの一種のムツケを煮たものをごちそうになりました。

さて、そこで去年の冬、石狩から14種もの宝物を盗んで行方をくらましたイナヲクシのことを尋ねてみると「その者なら、美馬牛にいます」とのことです、まずは一同安心し、それからこの家の主人、シユンクランに十勝川上流の案内を頼んでおきました。

まさら雄の ここで十勝と 聞よりも
まず名を愛て 一夜寝なまし

(我々勇ましい男たちはこの先「ここが十勝ですよ」と聞かされたなら

まずはその名前の美しさに感心し、そのあと一夜は眠つてしまふのかもしません)

3月11日

曇り。シユンクランの道案内で、ほんの少しの食糧米を持って、川の西岸に渡り、茅の原っぱを過ぎて2キロほど行くと、バンケニヨロフという小川に出ました。この辺りの川は浅く、崖の上から滝のように流れが落ちてるので、この景色を向こう岸から眺めたら、さぞかし景色が良いだろうと思いましたが、残念なことにここからでは滝口から滝つぼを見る形になり、その素晴らしさを十分に知ることはできません。ベンケニヨロフもまた同じように滝になつて落ちている川です。

この辺りは所々に仕掛け弓が数多くあるので、とても危ない場所でもありました。ここからまた2キロほど上るとレーラウシの川原、アイカツプの大岩があり、さらに2キロほどでベンナイとオソウシの小川を過ぎると、その辺りは雑木林がずっと続いていました。

1.7キロほど歩くと、今度は針葉樹の山になりました。ここまで道らしいものはありませんでしたが、ここからはトドマツが倒れていますところをまた跨いだり、くぐつたりしながら進む道となりました。

急斜面の大きな崖や、小さな滝のイロンネウシリが向こう岸に見えています。バンケキナウシ、
ベンケキナウシのふたつの小川はともに空知岳に源があります。

山はますます険しくなり、川には奇岩や怪岩、そして滝もところどころにあり、その景色は
実に素晴らしいものがあります。ピシカチナイ川の源は然別岳にあるといいます。400メートルほど
先の二ヘショチという小川は鮭も時々ここまで上つてきますが、ここから先へは上らないといい
ます。ここまで来たら早くも夕方になつたのでここで野宿をすることにしました。ここより上につ
いて聞いたことを次に書き記しておきましょう。

小川のバンケベツ、バンケベツの東岸にあるチカツベキツチという小川の西岸にはチカシトクと
それに並行するようにトンラウシの滝があります。この辺りは両岸が切り立った岩山で、それはま
るで鬼が斧で削ったかと思えるような光景だといいます。樹木はすべてモミやカバなどばかりで、
それは足の踏み入れる隙間もないほどに繁つていています。しばらく上ると、川が二股に分か
ります。そこまで来たら早くも夕方になつたのでここで野宿をすることにしました。ここより上につ

れる場所に到着し、ここから右の方はトウヌカルシといつて
川底が平らな岩の川で、その水源は然別岳の後ろにある常呂
の山から来ているのだといいます。左はシノマントカチと
いつてすべての支流しりゅうは大岩山のヲフラテシキの間を通つて、
十勝の山から来ているといいます。西は石狩岳いしかりだけ、東はウペペ
サンケ岳があり、その山の向こう側がわはトコロの川筋の源にあ
たります。実にこの山々は蝦夷地えぞちの母山と言うべきであります。
その翌日よくじつはシユンクランの家に泊りました。

3月13日



石狩岳

北海道の中央部にある標高ひょうこう 1,967 メートルの山。石狩
川の水源であることから名付けられた。

どこか物寂しい音を立てていて小雨の中、茅の草原を下

流へと2キロほど下りました。シユマーハラコシという小川を過ぎ、2キロほどでサツテキという野道の途中に渡った小川がありました。400メートルほど進むと5人が暮らすトノトク家と、4人が暮らすトントン婆さんの家の2軒があり、それぞれに針と糸を与えてさらに先へと進みました。クツタルシ、そしてその先のトミタビラは昔戦いがあつた場所だといい、石の矢じりや石の斧を拾うことがあります。私も3枚拾いましたが、大雪の後は石器や土器などを拾うこともあります。

その先650メートルほどとのころに人家が2軒ありました。2人家族のホキシロマ家、8人家族のアイニ家です。そこから540メートルほどで、大川がふたつに分かれる中州に位置するマクンベツに1軒、4人家族のアリケウトム家を見て、そこからさらに400メートルほどアシリビラという大きな崖があり、その上からは向こうにカブチヤ川、こちら側にはニトマフという小川です。

ここまで来ると、私たちが今日到着するということを当地のアイヌが前もって知つており、2人を道の途中まで迎えに出してくれたのに出会いました。それというのも、村への道は本道ではなく、

狹の道が1本あるので、迷つてはいけないという心遣いをしてくれたのです。その行き届いた心遣いに私たちは感銘を受けました。600メートルほどで3軒の人家があり、23人が暮らしており、いずれも長老アラユクの一族だといいます。

アラユクは74歳で、大形で薄緑色をした絹織物の広い袖の着物の上に、中国製の錦の陣羽織という立派な服装でした。そして2人の子どもに太刀と、刻みタバコが600グラムは入る大きさの煙草入れを持たせ、肩を覆う白髪、ひざが隠れるほどの長いひげを撫でながら、杖をついて私たちを出迎えてくれました。その姿といえど、心が穏やかでゆつたりとした貫禄があり、いかにも領内の長老といったところでした。



アイヌの煙草入れ

たばこはアイヌの人々に嗜好品として親しまれており、儀礼の時にも使われた。

また、然別のアイヌ、イナウタカアイノはその背丈は18トメ余りあり、三国志に出てくる胆の据わつた武人のような顔をしています。昔話に登場する茨木童子か酒呑童子かと思わせる体つきです。

アラユクとイナウタカアイノの二人の後ろに十数人の一族が並び、私たちが座ると、その中の一人が私に向かつて「ニシバ、イランカラブテ（旦那、お久しぶりです）」と話しかけてきたので、皆が驚きましたが、アラユクの次男のシルンケアイノという者で、どうしたことかと良く見れば、一昨年にオホツナイ川から、幌泉までの旅に同行してくれた者でした。

シルンケアイノは私の前にやつて来て、その時の礼を礼儀正しく丁寧に述べ、私もこのようない山奥まで来て知っている者に会うことは実に珍しいことだと大層うれしく思いました。そして、彼は一族の者に向かつて「この旦那は遠くは樺太のウイルタ、アムール川下流域の山丹、南樺太の多来加湾までも行つたことのある人だ」と、私を紹介したので、集まつた人たちの私を尊敬する様子が増し、それにつれて、樺太のことを色々と質問されるままに、こと細かに話して聞かせたので、

皆は大変喜んでくれました。そして、熊肉、鹿の腸、凍らせた鮭などを大きな平らな鉢にうず高く盛った料理や、アイヌの酒を勧めるのでした。宴が盛り上がりると、皆は腹づみを打ち、シノチサケを歌つて心の底から私たちをもてなしてくれるので

今日といふ 今日ぞしりける 一つきの

酒にまさりし 物の無とは

弘（ひろ）
（松浦武四郎）

（このように良い気分で飲む

一杯の酒に勝るものはない

今日はそれを改めて思い知った）



岸田農場の碑

アラユクが武四郎の一行をもてなした場所として石碑が建てられている。



アラユクが武四郎一行をもてなす様子。画家の田崎草雲が描いたもの。

右上の和歌は国学者で歌人の佐佐木弘綱が寄せたもの。

荒蝦夷が 腕で醸せし この酒は

鬼ころしとも 言べかりける

宗切（飯田豊之助）

（荒々しいアイヌの人々がみずから醸して作った酒は

「鬼ころし」と名付けるのがふさわしいような、味わいの酒である）

など、戯れに、そばの柱に書いて寝ましたが、1つ困りごとがありました。実は、昨日から私たち一行の全員が、下痢をしていて、たびたび大便に通わなければならなかつたのですが、アイヌの便所といえば、戸外に丸太を2本並べただけのもので、屋根も囲いも何もないのです。

その夜は暗い上に雨が降っていたので、便所の場所がどこかはつきりと分からぬまま着物の尻をまくると、雨で体がビショビショに濡れた何匹もの犬が、私の便を食べようと尻の下に首を伸ばし、犬たちが先を争つて噛み合いの喧嘩を始めるので、濡れた犬の冷たい毛が尻に触れるし、私の

尻にも股にも服にも泥をかけられるし、それといつたら不潔で汚く、これが今回の旅の中で一番どうにもならないことでした。

3月14日

北西の風が沸き起くる雲を払い去つて、晴天になりました。出発する際に、シルンケとエヲロサンを道案内につけてくれました。2キロほど行くと、小川のサオルコツ、向こう岸にラカトマフという小川があり、そこを過ぎたところに人家が3軒ありました。エチヤナレクル家5人、ノタヤン家7人、テムコロル家2人。それを過ぎると、ニトマフからおよそ8キロで小川の美馬牛に到着しました。ここには2軒の人家があり、そのうちのひとつ長老シリコンナの家に泊りました。

シリコンナは元、石狩チクベツの生まれで、幼いころから今の場所に住み、今では忠義と勇気を兼ね備えた人物として、召使10人余りをかかえ、ここから然別一帯までの一族の長を務めています。

ほど行くと、ハシユイヒラという平野、その向こう岸にはチフルという小川があり、そこを過ぎる快晴。ここからはシリコンナやイソラム、佐幌のヤエサラマら3人が案内役となります。700ドル

そこで、私たちは石狩で盗みを働いて逃げたイナヲクシについて尋ねると、シリコンナはさつそく私たちの前にイナヲクシを連れて来て「彼の盜んだ14の宝物たからものについては私たちが預かっており、一品たりとも失ってはいません」と、答えました。この対応には実に感心しましたが、彼はその上、イナヲクシの悪事を私たちに謝った上で「石狩のアイヌたちが今の旅程りょていを終えて山中の石狩に帰る際に、イナヲクンを連れて帰ってほしい」と言います。この考えは良いと思ったので、すべてのことはシリコンナに任せることにしました。夜になると、イソラムといつて日本語が分かる者をわざわざ呼び寄せ、私たちの道案内につけてくれることになりました。

3月15日



鮮やかな色彩の「ブクシヤキナ」。画家の春木南華が描いたもの。

と人家がありました。5人家族のヤエサラマの家で、そこから300メートルほど坂を下りると川幅35メートルほどの佐幌川の河口に出ました。流れが急なので私たちは手を繋いで川を渡りました。

この佐幌川というのは十勝川の第5の支流で、水源は佐幌岳から来ており、この山の右後方には夕張岳があり、新冠川、沙流川なども同じ方角にあります。佐幌川の河口には人家が1軒ありました。ヤエケシユクといつて元は石狩出身のことです。

佐幌川を越えると、5人家族のイソラム家、4人家族のヲヒツタコロ家があり、その東岸にはフシコサヲロ、シイ

ベンベシという2つの小川、その方角にはヲベベナ、ホネウリなど柏の林の丘おかが続いています。ビラウトルナイ、ヲムイタンネフの2つの小川、その向こう岸にはチブタウシベツ、マツクシマリンベツの2つの小川などがあるといいますが、この辺りはどの方角を見ても見渡す限りの平野で、その中を十勝川の本流が丘から一段低いところを曲がりくねつてゆるやかな曲線を描いて流れているのが見えます。この土地は石狩よりも温暖な気候のようで、既に雪は解けてすべて消えています。

コイチヤネシユツ、サネコロの2つの小川、そしてヌブリルイラン坂の上から四方を眺めました。およそ120キロ四方はある平野です。向こう岸のケネベツという小川、こちら側のシユブンシユ工という湧水、マクンビラなどを過ぎ、佐幌川流域を約20キロ下つて、川幅33メートルほどある芽室川河口に出了ました。この辺りはイチリンソウがたくさん自生していましたが、アイヌが好んで食べる草です。

この芽室川は十勝川第6の支流で、その水源は芽室岳にあり、その後方には静内川の水源があり



佐幌川

清水町を流れる川。この地区は酪農が盛ん。

ます。この川の南岸には4人家族のカモイコバシ家、4人家族のアバトシマチ家の2軒の人家があり、カモイコバシはことし83歳ということです。20歳のころには沙流さるの山々、夕張の山などに出掛け、1789年には国後島、根室目梨方面で起こつたアイヌの和人に対する反乱「寛政の乱（クナシリ・メナシの戦い）」にも出たというので、その時の話を詳しく聞いたところ、間宮林蔵、最上徳内、近藤重蔵らのことを記憶していました。かねて人々は「アイヌは自分の年齢ねんれいすら知らない」などと言っていますが、「その中の誰々は私よりも何歳ぐらい上です」とか、「誰それは私と同じぐらいの年齢です」などと、おそらく60年ほど前の出来事を、アイヌ語で思いのほか事細かに話してくれるのであります。

3月16日

非常に深い朝霧あさぎりで、近い距離きよりのものも区別できないほどでしたが、少し高いところに出ると霧ひじょうが

晴れました。考えてみると、霧は川に沿つた地帯の現象げんじょうだつたのかもしません。レウケメム、リウカなど幅5メートルほどの川があり、向こう岸には美蔓川やその支流、ホヌンピット、アシリビラという崖を越えて、茅室めむろからおよそ6キロの場所に川幅33メートルほどの美生川河口があり、ここに人家が8軒ありました。



冬の茅室町

町名は、アイヌ語で「泉いざみから流れている川」を意味する「メム・オロ・ベッ」から名付けられた。

ヲツタクス家7人、チウラクル家6人、エクレ家2人、ハウコホ工家4人、ノネット工家6人、イシチヤリ家2人、チソンコタフ家3人、アシチヤコ家4人です。ここから札内さつないに行くには山道があるといいます。なお、この美生川は十勝川第7の支流で、その源はピパイロ岳にあり、その後方はシビチ



ヤリの方向だといいます。

向こう岸にホヌシベツト、ウバラベナイ、イコベツケシメイ、シユブシヤリ、シユブンシマリシトウシなどの小川を見ながら、十勝川沿いに進みました。

茅原が広がる中をそのまま下つて小川のライベツ、チエカリトンナイを渡りましたが、すべての川の上流方面は一面の原野です。美生川河口から



然別川

大きく曲がって流れていることから、「自分を回す川」を意味するアイヌ語「シ・カリ・ベッ」が由来。

川筋をおよそ10キロ進むと、向こう岸に川幅36メートルほどの然別川があり、その付近に人家が16軒ありました。その源はウペペサンケ山にあり、その後方は常呂に当たるそうで、十勝第3の支流です。また、東岸を少し下ると、泉が湧く小池のフウレム、小川のサリケショと過ぎたところで、神鳥のフクロウの鳴き声を聞いたのでここで一首

日は暮るゝ 越方いそぐ道の邊に

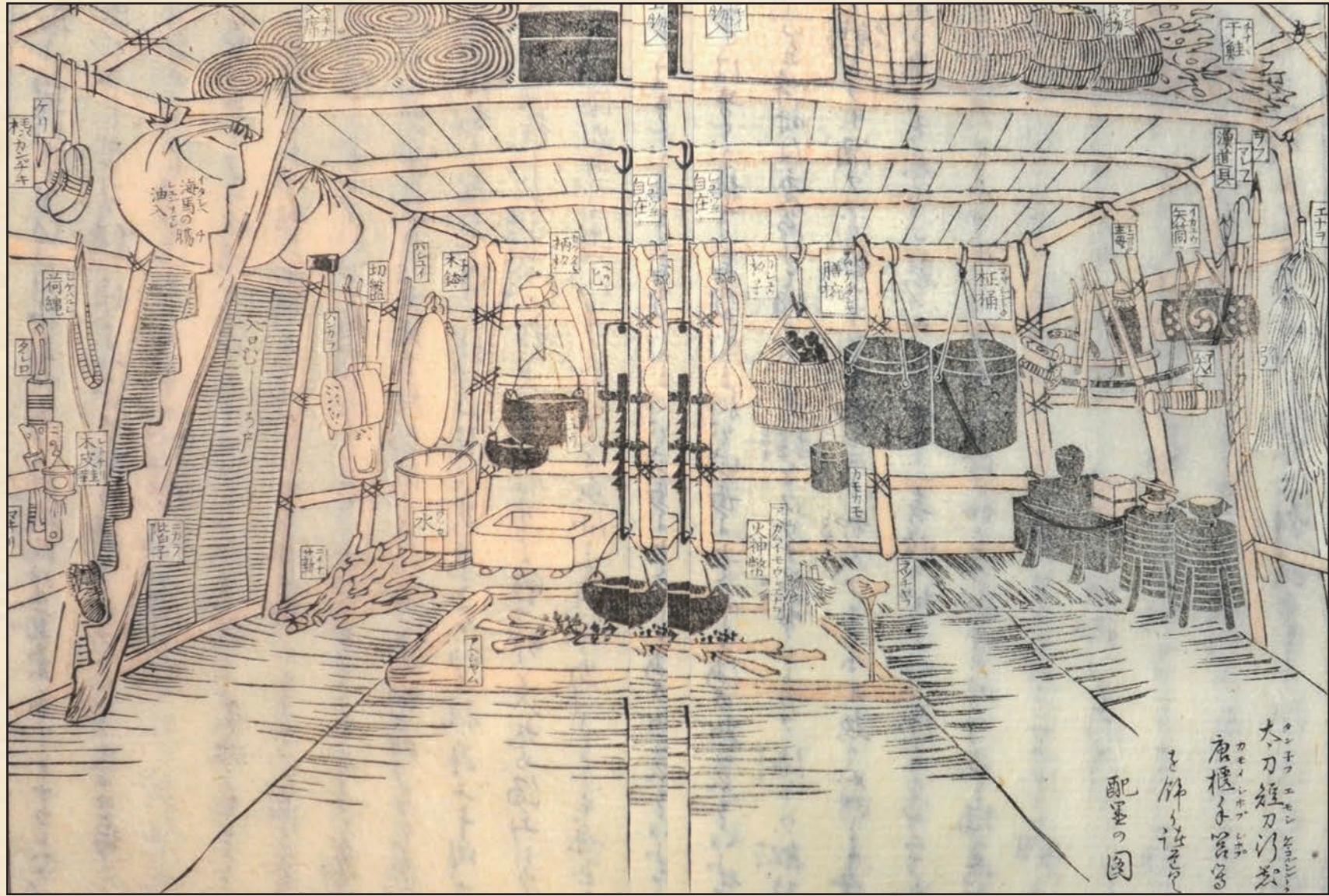
鳴ふくろうの聲にくげなり

(日が暮れてきたので、明るいうちに宿に着こうと

道を急いでいるとフクロウの鳴く声がした

夜目の効くフクロウの鳴き声は

憎々しく聞こえてくることだ)



アイヌの住居「チセ」の内部。道具類が整頓されている様子が分かる。

武四郎が描いたもの。

それから川幅30メートルほどの音更川の河口があり、その川筋には人家が21軒ありました。この川の源はクマネシリ岳の後方にある、陸別、常呂の山々の間から流れ出ており、十勝川第2の支流にあたります。

さて、川に沿つて西側の崖を進んできましたが、茅室岳、ピパイロ岳などの山々まで遮るものもなく茅原が続いて見えます。音更川を過ぎて小川のチヨマトーの辺りは谷地で、アシやオギの原を越えていきます。ビバイルからおよそ18キロで幅15メートルほどの帶広川に到着しました。ここには人家が2軒あり、いずれも4人家族のアルランコキエ家、アイシテ家です。

あたり一帯の長老のシラリサ（71歳）がここまで、私たちを迎えて出向いてくれていましたので、ここ帯広で泊まることにしました。明日からは舟で十勝川を下る計画なので、舟の手配を頼みました。この帶広川は十勝川第9の支流で、札内川の流域の戸蔦別川から来ているといいます。この川の流域は一帯が広い平野で、土地が非常に良く肥えています。

3月17日



チヨマトー

アイヌ同士の戦いで多くの血が流れ込んだという伝説が残る沼。チ・ホマ(害を受ける)トウ(沼)という意味。



音更川

この一帯は髪かみのように多く柳やなぎが生えたため、アイヌ語で「オトプケ(髪が生える)」と言われたとされる。

シカコロとノネット工の2人で、舟の上で戯れに漢詩をつくつて飯田氏に見せました。

氷雪の雪山まさに三十日にならんとす
蓬底何ぞもちいん睡りにつくこと無きを
送迎两岸幾多の山

(氷雪の山を越えること30日にならうとしています)

夜明けに舟をやとつて川を下り少し余裕が出たように思います
だからといってどうして舟の底で眠つていられましょか

舟が進むにつれて両岸の山々が過ぎていきます)

チエツフマクンベツの東岸、フシコオベレベレヲの西岸、ホンベケレの東岸はいずれも急流で矢のように早く流れています。この辺りの川筋は複雑で、その上、流れに倒された木が数多く横たわって流れをはばんでいるので、雨のたびに川筋の様子が変わってしまいます。この土地の人でさえも、この辺りの川筋を舟で下ることは非常に怖がっているということです。

また、この辺りは十勝石と呼ばれる良質の黒曜石があると聞いたので、中州に舟を繋いで探してみたところ、わずかな間に10個余りを拾うことができました。その中には虎のようない縞のある虎斑と、白い筋がはいったものの2種もあり、これらは最も珍しいものでした。

ヌブカの西岸には人家が4軒あり、それを過ぎると東岸にホンベケレ、ヤウシがあります。ヤウシは秋には鮭漁をするというところだということです。私は舟に腰を下ろし、水しぶきとなつて舟底にたまる水をワツカリという汲みですくつては捨て、またすくつては捨てを繰り返し、帶広から6キロで川幅36メートル余りある札内川と十勝川の合流する地点に到着しました。札内川は十勝川第4の支流で、その水源は神湖カムイトウにあるといいます。

その上流にある山は十勝、様似、浦河、三石の4つの場所にまたがり、頂上には1つの湖があつてトドやアザラシが住み、ワカメもあるといい、それは時々下流に流れてくることもあるそうです。湖は東南の風が吹けば水が増え、西北の風が吹けば例え100日間雨が降り続いても水は増えないと

言い伝えられています。

その不思議な山は昔から頂上に登った人はいないといい、かつて札内のアイヌが一度登つて消息を絶ち、最近では同じ札内の長老マウカアイノ親父が数日分の食糧を持って川筋を伝つて登りましたが、1つの大きな滝があり、その先は近くにあつた木の根に取り付いてよじ登ろうとしましたが、天がいきなりかき曇り、山鳴りがして地面が揺れ、物凄い勢いの雨が降りだしたので、とうとう登頂とうちょうをあきらめて帰つてきました。その後、何度も同じことに挑戦ちょうせんしましたが、滝まで行くと空が曇り、激しく雷かみなりが鳴るので、恐れおののいて体が震え、どうしてもその先には足が進まなくなってしまい、とうとうあきらめたという話を聞きました。

札内ではそういう言い伝えですが、浦河で聞いてみると「私たちは山の南側から登つて行つてみましたが、頂上には1つの石でできた御殿ごてんのような立派な岩屋があり、その後ろ側に湖があります。それらが見えるところまでは誰もが猶りょうに行きますよ。しかし、それも谷を1つ手前に隔てたどこ

ろまでで、その御殿ごてんを拝んで帰ります。これは昔からそれ以上は近づいてはいけないと言い伝えられているからです」とのことでした。

特にこの山に登るときは海に関係のある物の名前を言うことを禁じられており、もしもどうしても言葉にしなければならないときは名をえて言うそうです。まず、塩はフウナ（灰）、昆布をシトカフ（ブドウのつるの皮の纖維せんいの糸）、海をトウ（沼）、舟をキツチ（桶）、鮭たらをチライ（いとう）、酒をワツカ（水）、クジラをヘイセ（息を吐く）、水豹あさらしをシヌイ（入れ墨すみ）、和人じやくじんをアチヤホ（おじさん）という風にです。また、この山でとれる鹿は毛が黒く、まるで熊の毛のようだといい、本当に不思議な場所です。

同じ湖を札内側のアイヌは見たことがなく、浦河のアイヌの多くは早春の凍つた雪の上を登つて谷をへだてて拝んでいる、ということになります。実際に札内の長老が登った話はこの年の7月に再度立ち寄った際に、98歳のハウサナリルに聞き調べ、その後、浦河のアイヌたちにも詳

しく聞いたところなので、そのままをここに書き記しておきます。

さて、札内川からさらに十勝川本流を下っていくと、西岸にはベツチャラがあり、人家がありました。東岸にヘヨイ、幕別、サツテクマクンベツ、サツトカチなどがあり、ジロトウには人家が5軒ありました。これを過ぎると途別川で、その名にふさわしく相当幅の広い川です。右の方に沼があるエモエントウ、人家が2軒あるホロノコツチャを過ぎた辺りから川の流れは少しゆっくりになり、川幅も広くなり、ヤナギやハンノキ、ハルニレ、サルナシ、山ブドウなどがたくさん見えます。

稻志別川、幌内川、そして咲別川の岸には人家が10軒あります。音更川と利別川の間の原野から来ている川です。これと並んでトウロ、少し下つて札内から18キロほどの位置に、川幅約15メートルの猿別川があります。十勝川第10の支流で、その上流は歴舟川と札内川と同じ方向にあり、幾筋もある小川が合流して猿別川になっています。これを過ぎてカモキナイに人家が4軒、続いて止若があり、ここに長老のイキリカシが住んでいるというので、舟を新しく替え、荷物を積み直して案内人を新しく雇いました。



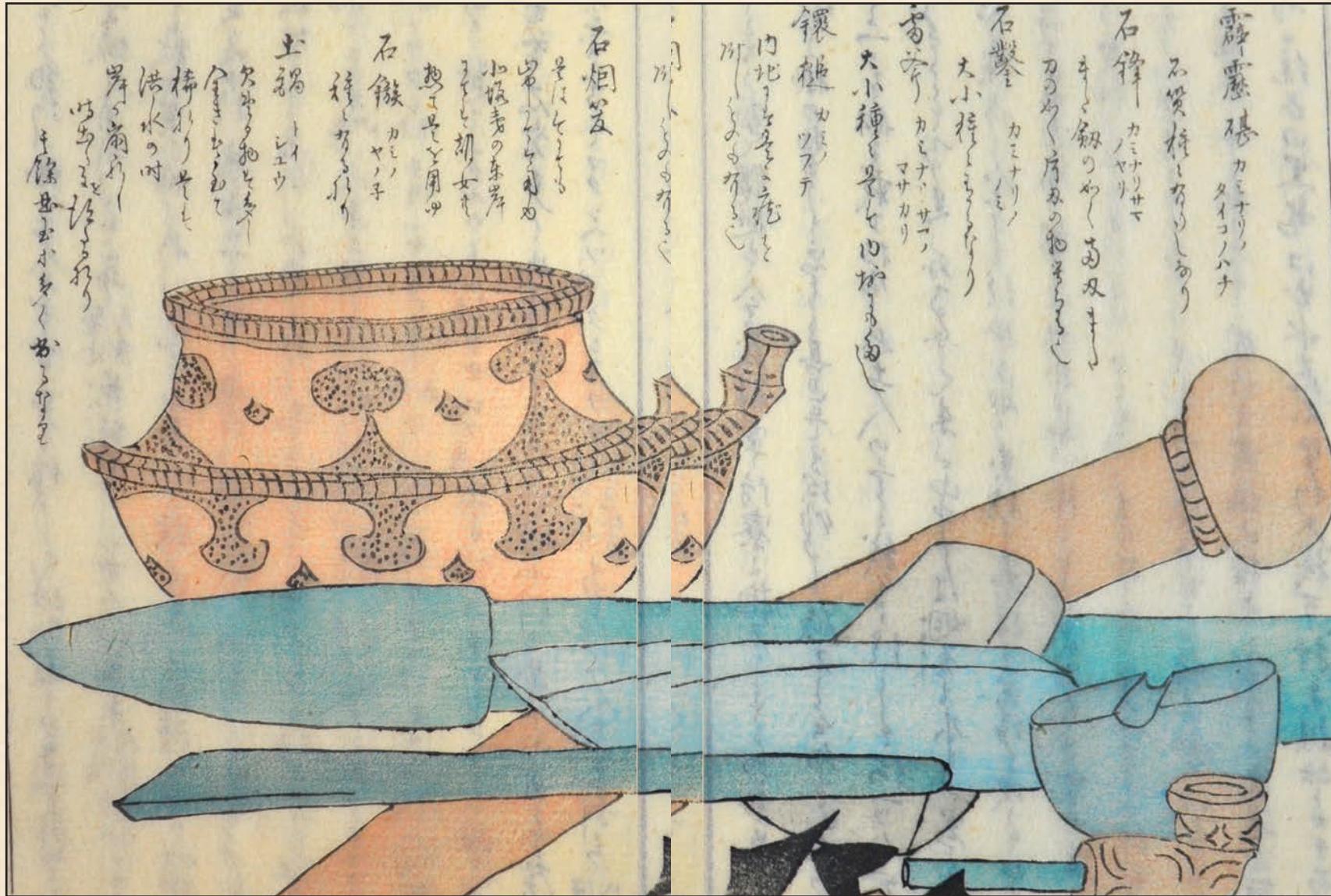
歴舟川

かつては砂金が多く取れたため、「宝の川」と称されることもある。



冬の日高山脈

幕別町からは南部に連なる大山脈が見える。町名は「マクンベツ（山ぎわを流れる川）」から。



土の中から見つかる土器や石器の図。武四郎自身が描いたもの。

その土地は肥えていて農作物が良く育つように見え、少しですが粟の畑がありました。前もって私たち一行がここに来るのを知っていたので、私たちが到着するとすぐに粟団子をつくつてふるまつてくれました。その作り方は粟をついて粉にしたものにウバユリの根のでんぶんを合わせて杵でつき、その中に鮭の卵を入れて丸めて団子にしてゆで上げたものです。私にはそのまま出してくれたのですが、アイヌたちにはこれを魚の油で揚げて出していたので、そちらも食べさせてもらつたところ、とてもおいしいものでした。

ここを出発してトウロ、幕別川河口、ライベツそして辺



ウバユリ
アイヌの伝統的な保存食。ユリの仲間で、花が咲く前に球根を掘り、でんぶんから団子をつくる。

りに人家が8軒あるフルケシで、この辺りの地名をチヨダというそうです。ここを過ぎてセラロシヤムを越えましたが、この辺りは両岸とも平地が続いています。止若から約3.9キロでやがて幅18メートル余りの利別川の河口に到着しました。流れはますますゆるやかになっています。

この川は十勝川第1の支流で川筋には27軒の人家が点在しています。20キロメートルほど上流では流れはふたつに分かれしており、右を釧路領、足寄川沿いにアイヌの家が13軒あり、その源流は雄阿寒、伊由谷の2つの高い山にあります。左は本流で源流は陸別、ウペペサンケ、クマネシリなどの山々にあります。ということは、この上流は常呂川、網走川、釧路の舌辛川などの上流にも近いということになります。

この辺りの十勝川本流筋を行くと東南東、南南東、南の三方向に向かつて進路をとることになります。ただ、この辺りの流れは、まるで竜か蛇のように曲がりくねっています。ここを過ぎてチシネライ川、十弗川、オンネナイに人家が2軒あり、ニウシベツへと進むと、両側に少し山並み

が見えました。そのふもとにはヤシコダン、テレケブ沢、下テレケブ沢、向こう岸には打内太、クーリョツキ、ニヲビウカ、ラシヨシケ、ヲヲクリキ、そしてリフンライです。リフンライの元の名はレフングルライで、その意味は「海外（レフン）の者（クル）の死（ライ）」ということで、その上には穴居跡のトイチセが30軒余りありました。土地の人たちはトイチセのことを小人の住居跡だと言っていますが、これは小人ではなく、大昔の人たちが暮らした穴で、こういう遺跡は本州の各地で見たことがあります。

例えば奥州の松島（現宮城県松島の辺り）には岩壁に穴をあけて住んだ跡があり、常陸國風土記の茨城郡には「いたるところに土の穴倉を設けて掘り、常に穴に住み、人が来ることがあると、ただちに穴倉に入つて隠れ、その人が去ると、また野原に出て遊んだ」と記してあります。

また、この山からは縄文時代の石斧や土器のかけらなどが出土するそうで、私もここで2枚拾いましたが、土器が完全な形で出土するのは極めて珍しいそうです。地元の言い伝えによ

れば、その昔、この地に鉄製の器具がなかつた時代は鍋も土でつくり、野菜や魚、獣の肉などを切るのには縄文時代の石斧を使い、家財道具を作るのには縄文時代の石錐や弥生時代の石斧などを使い、人と打ち合つたり、叩き合いをしたりするのには石でできた斧や槌を使つたといいます。

これはつまり、日本書紀で道臣命が歌つた「みつみつし 来目の子らが頭椎い 石椎い持ち撃ちてし止まむ」（武勇に秀でた来目の若者たちが頭槌の太刀、石槌の太刀を手に持つて、敵を撃ちのめしてしまおうぞ）と同じことであるでしようし、令義解（律令の解説書）の軍防に「石を投げ打つ」というのがあり、これは小石に繩をつけて投げつけて相手を倒した物だと思われます。またその近くにはそれらをつくるために使つた砥石も3つ4つと見つけたので、そのうちの1つを拾つて舟に持ち込みました。

この地のアイヌが「私たちは捉として和人の土地から何ひとつ持つて来なくて不自由なこと

はなかつたものです。今でも山奥ではキセルを木か岩で作つて使っています。少しずつ海岸近くに住むようになり、生活の道具や衣服もぜいたくになり、今では私たちは木綿の衣服を着、真鎗のキセルを持つようになりました。それだからアイヌの気力は衰えて力も弱り、正直で飾り気のない素朴さも失われつつあるのです」と話していたが、いかにもその通りだと感じるところです。

またこの地では石の矢じりも数多く出土しますが、すべて黒曜石でつくられたものです。このことは尾張国風土記に「天種子命が三角の石弓と玉の大羽矢を持つて……」とあり、中国の歴史書でいうところの「肅慎氏の楛矢石砮」、



大昔の人たちが使った石器類

狩りや漁のほか、木の実などをすりつぶすなど、調理にも使った。帯広百年記念館で撮影。

文選の「文鏡碧砮」、中国の地理書「大明一統志」にも「黒龍江（アムール川）の下流域から見つかる石は堅く鋭く、矢じりに適している」とあるように、この黒曜石も硬くて鋭いことは他とは比べ物にはならないので、アイヌたちはさまざまに利用したのでしょうか。ことし（1860年）、日本で初めてアメリカに派遣された渡航使節団の中に、豊後杵築の佐藤恒蔵秀長氏が、アメリカから石の矢じり2、3枚を貰つて帰つてこられましたが、こちらは白く、やはり非常に硬くて鋭い石でした。形はさまざまありますが、この地と同じ石器でアメリカ人が言うには「大昔に使われていたものです。今も時々出土します」とのことです。そうするとはるか遠いアメリカの地でも大昔に石器をつかっていたのだと思いました。

さて、リフレンライから少し下るとユツクシフト川、農野牛川、カツケン川、そしてトヒヲカに2軒の人家がありました。止若からここまで来ると、陸路はなく、川筋を舟で行くしかありません

でしたが、ここからは道があります。向かって右方向にはチウヌベツチャラ、農野牛川、チキシャニタイホ川、牛首別川、ワサル川、そして人家が4軒ある背負川を過ぎ、ニクルウトル川、マサロフ川、その上流に砦跡があり、縄文時代の石器類がたくさん出土するそうです。

ヌツハ、ここは曲がりくねった川の曲がり角に位置し、広々とひらけています。ここを過ぎるとマクンベツ、タシネヲタで、川幅は360メートル余りあります。この両岸には人家が6軒あり、利別河口からおよそ31キロの地点になります。川岸で野宿をしましたが、イチリンソウやアザミがたくさん出ていたので、これを摘んで和え物にして

食べました。

3月18日

早朝、川霧がもうもうと立ち込めて薄暗く、まるで夢の世界をさまよつてているようでした。月がまだ天の真中にありますから支度をして川を下りました。川幅が360メートルほ

どのホノタ川、バラウツカ川は広々として眺めも非常に良

く、湖の上を進んでいるような気がします。人家が2軒あり、そこを過ぎると旅来、ベツチャラがあり、ここで十

勝川は2つに分かれています。右は130メートルほどで大津川、左が180メートルほどで十勝川、こちらが本流です。ま



旅来渡船記念碑

昔は橋がなく、渡し船で川を渡っていた。1992年に橋がかかり、記念に船の形をした碑が建てられた。



農野牛川

アイヌ語で「ノヤ（よもぎ）ウシ（～の群生するところ）」、「よもぎが多く生える場所」という意味。

ずは本流の記録を1860年の日誌から抜粋して書き留と
めておきましょう。

まずはホーヌイ、アシネシユム。ここには人家が6軒
あり、続いてタツタラ、ヌタベトで、ここには人家が3軒、
その向こう側には幅18メートルほどの浦幌川の河口で、その水
源は足寄の南、釧路領の本別川上流から来ており、十勝
川第9の支流です。河口に人家が2軒あり、川を下つて
シチネイ、それに並んでオベツコハシ、ここに人家が9軒、
そこを過ぎてベツモシリという中州なかすがあり、アシやオギ
が生えています。左の方には人家が3軒あり、ここには
渡し舟がありました。この一帯を十勝村と呼び、幅およ

そ290メートルの海岸の河口になり、ベツチャ口からの距離きより
は6キロほどになります。

なお、今回の私たちはベツチャ口から右方向、大津川へ
と下りました。しばらく行くと、カンカン川、それから平
野があつてトンナイ川、ヲシヤリニ原、長臼おさうす、ここは網引
き場で、その少し上には人家が11軒ありました。ここを過
ぎて芦原のヲシリケシヤウシ、トシラエイ川、ウツナイチャ
ラ川があり、この流れはオホツナイの方に向かっていると
いうことです。ヘトアニ原、網引き場のタンネヤウシ、こ
こに人家が3軒、そしてベツチャ口から3.9キロほどでオホツ
ナイの河口に到着しました。



十勝発祥の地

オホツナイは明治3年に大津と改称され、北海道發展の中心地となつた。



浦幌川

浦幌町の中央を流れる川。浦幌十勝川に合流して太平洋へと流れる。

まずは最初に酒たる1樽を用意させて山中の旅の無事を祝おうとしたところへ、根室ねむろへ使者として出向かれる途中の橋本悌藏氏はしもとていぞうがここに泊まっているのに出会いました。

それで、橋本氏からも私たちの無事を祝おうと酒1樽を贈おくつていただいたので、それも併せて弁財天べんざいてんを祀まつる神社までアイヌたちと運び、神前に一同が座すわり、頭を上げて見回せば、私たちが越えてきた石狩の山々の峰みねが遠くの空に見え、空知そらち、佐幌さほろの山々も雲くもか霞かすみかというほど遙はるか彼方かなたに見えました。ここでつたない歌を一首、アイヌたちにイナウをつくらせ、その柄えに書き記しました。

祝詞のりと

日本と蝦夷えぞ、国じゅうにいらつしやる

すべての天の神、地の神様にお願い申し上げます

この国あんたいが安泰あんたいで、海うみが安全で、野蛮やほんな外敵がいてきを打ち払はらうことができ、土地の開拓かいたくがすすみさまざまな穀物こくもつが豊かに実りますように

鳥だにも 通ひぞかたき 石狩いしかりの

山路やまとをかるがろ 我は越こえけり

弘ひろ（松浦武四郎）

（石狩山地は険しく、空を飛ぶ鳥さえもその行き来は簡単ではありません
しかし私はその山を軽々と越えてここにやつてきましたよ）



十勝太遺跡

旅の終着点であるオホツナイでは、約1000年前の集落跡が見つかっている。

しづが身も しばしば雲の上人と
なりて越來し 石狩の山

宗切（飯田豊之助）

（たいした身分でもない私ですが

この旅では雲を越えるような高い山に登り

雲上人の気分を味わつて

石狩の山を越えてきました）

一同が存分に酔い、道案内をしてくれた石狩山中のアイヌたちなどへそれぞれ土産物や報酬をそろえて皆の者に配りました。

3月19日

石狩からずつと一緒だった飯田氏はここから広尾の方に向かい、アイヌたちは再び山に入つて石狩へ、私は釧路の方へと三方に分かれて出発しました。ここで一首を戯れに歌いました。

あつぶすま 今宵は雲にしきかへて

あくまで 飯をして いざねむ

弘（松浦武四郎）

（今日までは野宿続きだったが、今夜は雲のようにやわらかな布団で眠れる

思う存分飲み食いをして、さあ、寝るとするか）

安政5年（1858年）十勝日誌 終



十勝川河口

多くの支流を集め、太平洋へとそそぐ。